

第 106 回公開シンポジウム

## テレビドラマの世界はこうして創られる ～脚本と演出の関係とは?～

◆ プレゼンター      阿 部 康 彦  
NHKアーカイブスEP／アーカイブ推進担当(元NHKドラマプロデューサー)

◆ パネリスト      稲 垣 恭 子  
京都大学大学院教育学研究科教授／教育社会学

◆ 司 会      一 色 伸 夫  
甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第106回「子ども学」講演会を始めます。今日のテーマは、「テレビドラマの世界はこうして創られる ～脚本と演出の関係とは?～」という面白いタイトルです。東京からプレゼンターとして、阿部康彦先生に来ていただきました。阿部先生は、NHK アーカイブス エグゼクティブプロデューサーで、アーカイブス推進担当。元、NHK のドラマプロデューサーです。パネリストは、京都大学大学院教育学研究科教授、教育社会学の稲垣恭子先生です。こういう素晴らしい先生にお越しいただきました。早速、今日の概要をお話します。

大人に対しても子どもに対しても、その心を「動かす」ことを目的として制作されるテレビドラマは、脚本に基づいてドラマ全体が具現化されています。設計図としての脚本にはどこまでのことが指定されているのか。それを演出者はどう考えながら、スタッフや俳優とともに撮影をして編集や音付け等までまとめ上げていくのか。実際のドラマ映像と脚本を使ってテレビドラマ作りで行われている創作的な統合作業の過程についてひも解いてみます。

簡単に、阿部先生がどういう方かをお話しますと、NHK のドラマ部で、テレビドラマの制作・演出を24年間位ずっとされてこられた先生です。それから、NHK 放送文化研究所でテレビ研究、視聴者研究、ドラマ等のことを含めて研究をされています。その後、NHK アーカイブス 学術利用トライアル、今は、NHK エンタープライズに所属されて、いろんな仕事をされておられます。具体的に阿部先生が演出として作られたものを簡単に言いますと、大河ドラマ『いのち』、連続テレビ小説『チョッちゃん』子どもパビリオン『ひかるサケ』、NHK スペシャル『空白の絵本』等々、演出としてやられています。プロデューサーになってからも、水曜ドラマ『暴力教師』大河ドラマ『北条時宗』土曜ドラマ『抱きしめたい』これは芸術祭優秀賞を受賞されている作品です。それから、放送80周年ドラマ『ハルとナツ』こちら非常に有名な番組ですが土曜ドラマ『ハゲタカ』、そういった作品をプロデュースされてこられている方です。

それから、京都大学の稲垣先生は、京都大学教育学部教育社会学科卒業、同大学大学院教育学

研究科博士課程退学、その後、滋賀大学助教授、京都大学助教授を経て、京都大学大学院教育学研究科教授でおられる方です。その間、英国オックスフォード大学、ヨーク大学客員研究員、放送大学客員教授等々を歴任されています。教育テーマは「女性の教養と理想的女性像の歴史社会学的な研究」「女性文化人の社会学的研究」等々。このような素晴らしい研究がごございます。

では、さっそくプレゼンターの阿部先生にお話をいただきたいと思います。

**阿部：**NHK アーカイブスの阿部です。よろしくお願いします。

私は今、NHK アーカイブスで、NHK で未保存の古い番組のテープを集める番組発掘プロジェクトというもの、大学の研究者にアーカイブのコンテンツを研究用に閲覧していただく学術利用トライアルという2つのプロジェクトに関わっています。ドラマ制作やそういうアーカイブスの経験を踏まえて、お話をさせていただきます。ただ、決してこの場でなされているような学術的な知見を語るというようなことでもございませんので、どうぞご了解ください。むしろ楽に聞いていただいて、ドラマに興味を持っていたら、というつもりで考えております。

先に、私自身が興味あるものですから、皆さんに質問をさせていただきたいと思っています。皆さん自身のことなのですが、該当する方はお手を挙げていただきたいのですが、「最近3～4年の間に、テレビドラマを見て、泣きそうになったことがありますか？」または「泣いたことがありますか？」と問われた時に、思い出してみてください。「泣いたことがある」方、挙手を願います。半分くらいですかね。いえ、半分以上ですね。ありがとうございました。なるほど、そこまでかという気もしますが、テレビドラマを見て泣くということは何らか心が動かされてのことでしょうが、それがどういうことなのかというあたりが、テレビドラマの一つの可能性ですので、そのあたりのお話までできればいいなと思っております。

それではドラマ作りの話を進めていきますが、テレビドラマのことをここでは、簡単にドラマと呼びますね。ドラマを成り立たせる3つの重要な要素として、「脚本」と「俳優」と「演出」があります。あるドラマの中で俳優さんが、例えば柿の種をボリボリ食べながら話をしていたとします。これは脚本に指定してある場合もあるし、演出家が、そういう手が効果的だなと思って俳優さんをお願いしていることもあるし、あるいは俳優さんが自分のアイディアとして、こういう演技をしてみたいんですが良いですかというような演出家とのやりとりもありえます。実は、このうちのどれかはテレビを見ている側からは分からないです。制作の裏側がどうだったかを聞いていかないと分からないのですが、いずれ申し上げたように、脚本と俳優と演出家によって、ドラマの基本線が決まっています。私が現役の時、よく先輩から聞かされた話で、ドラマを成立させる要素というのは、脚本が5割、俳優さんが3割、演出が2割だと、そういう比率のことを聞かされたことがあります。意味するところは、脚本が極めて大事なことだと思います。これは脚本家を最大限持ち上げるために気の利いた人が言いだした言い方の可能性もあるのですが。考えると、優れた成功したドラマは、脚本の存在が確かに5割の力があつたとしても、それに引きずられるように俳優も5割の力、演出家も5割の力をだして、全部で150%位のパワーを持っていることが多いという気がします。そのパワーを引き出してくれる何かが優れた脚本には込められている。逆に、脚本を十分生かすためには、優れた演出家の存在が必要でもあります。

そういう互いに良きものを引き出すような関係性にあると思います。

ドラマの制作過程で、脚本家と演出家は、どういう仕事をしているか、企画が通った後からのお話をします。

企画が通ると、脚本づくりが始まります。すぐに脚本家の先生が一人で書き始めるわけではありません。ある程度何をやるかというお話が決まっているとしても、中身の打ち合わせが脚本家とプロデューサー、演出家との間でみっちり行われます。この日数は結構かけます。打ち合わせ内容は、ある程度決まっている扱う素材やテーマがあるとして、これをどう具体化していくか、登場人物の人物像、出てくる人たちの人間関係、最初の状況がどのように設定されているか初期設定的なこと、それから何か事が起こっていき、それがどう展開していくかというストーリー、といった形でいろんな話をするわけです。この段階では同じ土俵の上で、脚本家もプロデューサーも演出家もアイデアや意見の交換をじっくりと進めていきます。元となる原作があったとしても、取材のようなこと、シナリオハンティングと言われることもあります。さまざまな材料を集めつついろんな試行錯誤をしながら中身を詰めていく。少し内容が煮詰まってくると、一度脚本家が下書きのこと、プロットや箱書きと言いますが、下書きを作って、その上でより具体的な打ち合わせを進める。そして、お互いじゃあこれで行きましょうという目途がついた所で、脚本先生に執筆をお願いすることになります。ここからは、脚本家が独断で創作作業に入るわけですから、ある意味お任せの状態になります。脚本家がどう書いていくかの創作、執筆方法は、手の内を明かさないので私も分かりません。私の経験上で言えば、脚本というのは勢いというかパッションみたいなものでわーっと書いていけるものではなく、ある種とても計算が必要です。全体の構成を計算しつつ進める、論理的に物事を考えて積み重ねていくような所があります。それは、脚本家の執筆作業の根底にあるものとして感じました。私が何度か仕事で一緒した福田靖さんという脚本家の方いるのですが、大河ドラマ『龍馬伝』フジテレビの『HERO』や『ガリレオ』、今は『グッドパートナー』という弁護士のドラマを書いている方ですが、その方の話でなるほどなと思ったことがあります。要はカードを何枚か持っていたとすると、それをどうやって開いていくのか、どういう順序で開いていくのか、そのちょっとした違いだけでも、お客さんの興味を食いつかせることができるし、空振りしてしまうこともある。まさにこれは、計算です。

脚本家を書いた脚本は印刷が上がると台本という言い方、現場では、台本という言われ方をしています。どういう形式で脚本家を書いていくのか、どこまでのことを書いているかという話ですが、台本というのはいくつものシーンに分かれているのですね、Sいくつとあるのは、シーンのSですね。朝のドラマは大体15分の間に10シーン前後くらいです。あまりシーンが多いと撮影が大変になるので。そういうシーンの数のことも、脚本家が計算しつつやっているわけです。シーン立てをして、そのシーンはこの場所での設定かと、場所と、昼なのか夜なのかの設定が書かれています。表記の形式はNHKの場合だと上と下に分かれています。上に書いてあるのは、いわゆるト書きというものです。人物の動きを中心として諸々の客観の状況が書かれています。それはそんなに細かくは書き込んでいません。下の段にはセリフがずらっと並んでいる。脚本家の勝負所です。ト書きは小説の文ではありませんから、人物の心情的なことは書いていないです。その人が怒っているのか、喜んでいるのか、そういうものを

小説だと上手く表現しているのですが、それは脚本のト書きにおいてはしません。脚本家はそういった心情もセリフの中に込めるような形で、そこに込めるようなやり方をしています。ここが肝心なところですが、脚本では人物の心情のラインというか、感情のレベルは、細かには指定されていない。それは、台本を使って次の作業を進めていく、演出家を中心とし俳優たちにゆだねるということだと思います。ここが演出家の仕事のしどころといえますか、演出の大きなポイントと思っています。

演出の仕事に移ってきますと、脚本ができあがるとチームの主導権を握るのは演出家です。ちなみに、プロデューサーはその外側にいるような存在で全体をカバーしています。予算管理や脚本内容を外から統括的に見たりする存在で、実際に具体的に撮影の段取りも含めて全て進めていくのは演出家や演出アシスタントの役割です。でき上がった台本から、ロケかスタジオ撮影かを仕分け、シーンごとに分解して並べていって撮影のスケジュールが作られていきますし、演出家は、さまざまなスタッフ、スタッフを大きく分けると、制作と美術と技術とに分かれていて、普通のスタッフは30人ほど、もう少し居る場合もありますが、スタッフと打ち合わせをして、必要なものを指示していく。ただし、予算にも縛られていますし、時間にも縛られているという中で判断になります。台本に対して、カメラがどう撮影上使われるかの指示を書きつつ、美術や制作スタッフに対しての指示も書き入れて、それを印刷してスタッフに配ることもしています。民放やNHK、いろんなやり方の違いがあるのですが、全ての判断の元は演出家で、さまざまな形で指示をします。

撮影前には、俳優さんとの衣装の打ち合わせもありますし、台本を使いつつお芝居を固めていくリハーサルもやっていきます。そこでも俳優さんにさまざまな指示を出します。大御所の俳優さんにはなかなか指示を出せるというわけではありませんが、基本的には演出家が思っている方向に持っていこうとします。あくまでも台本がベースとなっていますが、先ほどお伝えしたように台本に全て書かれているわけではありません。美術的なことから技術的なこと。俳優さんに対しては、書かれているそのシーンの中で、俳優さんがどういうお芝居をするか、具体的にはその人がどういう動き方をするのか、どういう表情をするのか、一応脚本には書かれていますが、もう一度、演出家と俳優さんが一緒に煮詰めて、お芝居というディテールが固まっています。あくまでも軸になるのは演出家です。

撮影が終われば演出家は少し安心なのですが、これで終わりではありません。この後、編集をして、音や音楽を入れる作業があります。編集というのは、台本に基づいて撮影されたシーンをまずくっつけていきます。そうすると、大体は長くなります。長くなると、どう放送時間に合わせていくか。これが微妙なところでして、台本上あったものが、実際俳優さんが演じることで、とてもくどく見えることがあります。俳優さんの芝居の質にもよりますが。短くして上手く時間におさめていく、もしくは脚本とは違った形で、シーンの順を取り換えた方が面白いのではないかと、そういう判断もします。そして音や音楽入れの作業。このあたりではもう、仕上がり結果から逆算をしています。私もそうでしたが、音楽を入れる時が一番ワクワクするのですが、曲の種類やどこから曲を入れるかで、かなり印象が違ってきます。その計算がとても大事ですが、見ているお客さんは気づいていないと思います。どういう曲がいつ入っているか、いつの間にかお客さんの心を誘導しているかというのは、かなりの割合で音楽が担っています。その音楽をつけていく作業には音響さんという専門家がいますが、演出家が判断する中で行

うということになります。さて、連続ドラマ小説『チョッちゃん』は1987年のドラマですが、冒頭6分位を一度見てもらいます。チョッちゃんのモデルは、黒柳徹子さんのお母さんの黒柳朝さんという方で、娘つまり徹さんが小学生になるあたりの部分をご覧ください。

### <映像(約6分)>

徹子ではなく、ドラマ上ではカツコちゃんという名前になっています。カツコちゃんが小学校に行ったのだけと馴染めなくて、実際徹子さんがそうでしたが、先生が手を焼いて学校を辞めることになるというお話の一週間の放送です。出だしとしてこのカツコちゃんがどういう子に見えるか、見せるか、という点に、脚本も演出も気を使っている訳です。いろんな小細工をしております、飛行機の真似をして生垣の中に入ってきたら靴が脱げたという点は、決して台本に有るわけではなくて、私が演出として考えたのですが、成功しているかどうかはどうでしょうか？裏話を言うと子役がこれだけ出てくるともう撮影現場は大変でした。子どもがカメラ側にいるお母さんをどうしても見たりして、ほとんど撮影にならないこともありました。そういうことも総合的に計算しながらこのシーンを、例えば最初の一つのシーンで割り振られる撮影時間は、おそらくこれ位の長さだと40分位ですので、その40分間で一度テストをして、ランスルーという通しのカメラテストをして、それから本番というやり方をしていました。子どもがなかなか上手くいかないから、多分本番はスムーズに一回ではなく、何度もやったかと思います。

いったん脚本、演出から離れまして、私が整理をしてみた、ドラマを見ている人の充足感、面白いと感じたり心が良い意味で動かされるとはどういうことなのか5つのポイントをお話します。最初の「人物への好感」、つまり人間は他人を見るのが好きですから、テレビに映っている人に対しても、演じる俳優さんを好きになりますし、演じている役柄を好きになる、それだけでドラマに引き込まれるということです。断片的なカタルシスとは、ドラマに対しては気晴らしとか現実逃避とかを無意識に求めていることは多いです。そういう場合には、話の展開やセリフに一瞬でも気持ちや感情が動くこと自体が面白いことになります。例えば、楽しいワクワクする、ハラハラする、ホッとする、爽やかになるといった感情が生じるということです。ストーリーによるカタルシスは、本当に大切です。ストーリーラインが続いてきてある懸案が解消する、何かの展開に変わるというようなクライマックスで大きく感情が揺さぶられるかどうか、それがドラマの肝ともなります。次は共感という言い方をしていますが、ストーリーのラインではなく人物の心情のラインが作られていく中で、それがピークの時、その時に見ている人が、その人物の感情を理解して、なおかつ自分も同じ感情になることを共感という言い方をしています。分かるだけではなく、同じ気持ち・感情になるというのがミソです。それが一挙に湧き上がってくる場合、例えば人物が悲しいとか、切ないとか、とても嬉しいとかそういった振れ幅のある感情がある場合は、感情移入をしてきたその人に対して、本当に自分のことのように思って、一体化して、眼がうるんでくる、泣いてしまうというのが、一つのパターンです。テレビドラマを見て泣くという場合は、大体が、人物と人物との関係性の中で作られていることが多いのです。一つ一ついろんなケースで解明しなければ、なぜこうなっているのかと言えない部分ですけれども、そういう計算をする時もあります。学びと言われ



ているのは、テレビの特性だと思いますが、社会や社会の中の人間のあり方を学ぶ。いわゆる学ぶということは、テレビにおいてはとても大切な特性です。見ている人はあまり気が付いていない場合が多いですが、そういうことが充足の元になっていると思います。

演出家は脚本をベースとして、書き込まれていないことも含めてさまざま完成に向けて膨らませていくのですが、その時何を判断の基準としているかという、今の充足のポイントを少しでも満たすためにはどうすればいいかというのが、判断の基準になると思います。理屈で考えている訳ではないのですが、直感的にはそういう判断が必ず働いている。特に、ストーリーのカタルシスや心情における共感というのは、一瞬の点の話ではなく線の話ですから、演出の作業の中でその計算をするというのが基本と言えます。これは、脚本家も同じ意識でそれを作っている。ドラマを作っていく時に、その辺りをどうするかは、やはりものを作っている人間の共通意識としては、とてもあると思います。心情ラインのピーク、共感を与えるかもしれない部分をどこに持っていけるのかという点について、内心お互いに気にしながらやり取りをしています。

もう一回、『チョッちゃん』のある回を長めに、見ていただきたいと思います。戦争中の話で、主人公の蝶子さんの幼馴染の頼介君という人が、戦地に赴く前にあいさつに来るシーンです。小さい時から彼はチョッちゃんのことが好きだった。チョッちゃんは、それに気付いていても知らないふりをしていた。頼介君は、戦地に行けばおそらく自分は戦死することになるかもしれないと思っていて、つまり最期のお別れを言いにきたつもりでいて、この2人が互いに何を話すのか？ というシーンです。

#### <映像(約10分)>

なぜこの部分を持ってきたかと言いますと、これが果たしてこういう演出で良かったかなと、反省のつもりです。実は一つ覚えているのは、先輩からは、この演出は違うのではないかと言われたことがありました。私は違っているとは思いませんと言ったのですが、今回持ってくるにあたり気になって見直したら、違っているぞこれはという気がしまして。一週間のうち、一番大事なシーンであったし、これだけ長い時間、脚本家の金子成人先生も微妙に気合が入っていたシーンなのですが。多分、私は頼介君の方ばかりに気がいっていたと思います。彼がたくさんしゃべっているの、言えなかったことをここで言おうとしているから。そのために一回庭の方に立って行って、彼女の顔を見ないようにしゃべるとか、その後も彼女から外れるようにして見ないようにしていると、彼の方を気遣いしていましたが、本当はこのシーンは、それを受ける彼女のシーンとして、彼女の心情を丹念に描くような撮り方であったりお芝居の仕方をすれば、多分もう少し印象が違ったのかもしれない。頼介君の気持ちはまっすぐで、そんなに立ったり座ったりではなく、座って彼女の顔をじっと見ているという形にして、それをまっすぐ見るのがあまりに切ない彼女、という演出の方が良かったのかもしれないという気がしています。

見ている人に伝わる共感に至るまでは、いろんな計算を積み重ねていく必要があります。演出というのは、何通りもある訳ですから。あとは、俳優さんの芝居の質、芝居の方法も何通りもあります。

お話をまとめますと、脚本家と演出家の関係はお互いに活かしあう関係です。お互いにストーリーのカ

タルシスのラインであったり心情のラインを、どう共感に持っていけるかを意識してといいつつ、ある段階から脚本家はそれを演出家にゆだねるということでもあります。共通認識として脚本家が作った世界を大事にしつつ、それを膨らませていくという関係かと思っています。

私が最初に申し上げたドラマの可能性から言いますと、カタルシスだけでもドラマは作れます。たとえば少し古いですが、アメリカのドラマ『24』は、カタルシスのストーリーラインのドラマですが、日本はわりとじとじとした心情ドラマ的なものが多いかもしれません。今はカタルシスのラインも共感に向けた心情ラインも、上手く絡み合わせてドラマを作っていくように試行錯誤をしている段階かなと思います。ただ、共感できるような心情ラインを大事にしていくのであれば、おそらくテレビの中のドラマという形態は、まだまだいろんな可能性を残しているという気はしています。

共感のドラマという意味で私が最近いいなと思ったのは、この冬フジテレビの月9でやっていた『いつ恋』『いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう』というドラマがありました。ストーリーをじっくり作るというより、心情ラインを丹念にたどっていくとどういうドラマができるだろうというのを坂元裕二さんという 트렌ディドラマ時代からの脚本家が、すごく丹念に作っているのを演出家も俳優さんもそれにのっていました。地味なドラマだけどいいドラマだと思います。見ていた方いますか？ このドラマを見ている人は、途中途中でなくずっと見ようかなという気がする類のドラマ。等身大の若者のドラマは、いくつかありますが、今の時代の若い人のドラマを作るとああいう感じになるのかなという気がして、私は毎回泣いていました。うまいなと非常に思いました。ということで、今日のお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

一色：阿部先生、ありがとうございました。脚本家と演出家と俳優と、いろんな人たちが集って、この素晴らしいドラマがいろいろ生まれてくるわけです。ドラマは、総合芸術だと私は思っています。総合芸術という意味で、皆さんも芸術というのをドラマの中に見ていただきたいなと思っています。最近、私が泣いたドラマは『あさが来た』です。最後に死んでしまった亭主のあたりは非常にびっくりしました。それから少し前ですと『あまちゃん』です。あまちゃんのことをベースにして、ここからは稲垣先生にコメントをいただきたいと思っています。

稲垣：京都大学の稲垣です、よろしくお願いします。阿部先生、ありがとうございました。個人的に聞き入ってしまい、特に最後の出征シーンの所の解釈は、非常に面白く聞かせていただきました。演出家の役割は2割とおっしゃられましたが、かなり大きいような気がしました。出征シーンは、いろいろなドラマであると思うのですが、その作りによって、どういう感動なのか非常に違うのだなと。私も立って庭の方を見てという時に、これでちょっとうるっとくるシーンだなと思って、戻ってきてちょっと言いにくいけれども後ろを向いているから余計に気持ちが高揚するという解釈なのだなと思ったのですが、また同じことをやっても俳優さんによってイメージがすごく違うため、あの二人だったらストレートでも良かったのかなとおっしゃったのもなんとなくわかる気がしまして、やはり脚本と演出と俳優さんとセットで作られていて、いろんなやり方があっ

て面白いんだなという気がしました。ジグソーパズルのピースみたいな感じで面白いなと聞かせていただきました。皆さんもいろいろなことを思っていच्छやと思います。

『あまちゃん』の方に話が変わりますが、最近のテレビドラマで、すごく人気があったドラマです。皆さんの中で『あまちゃん』を見たことがある方いच्छやいますか？ そんなに多くないのですね。見ていた方は、結構はまった方も多いかと思うのですが、私の解釈は、小説やドラマが好きでそれを授業の素材としてあるいは研究の素材として使いますので、そういう目線で見ってしまうのですが、皆さんはまた違う角度でご覧になるかと思います。今日、阿部先生が制作側の立場で来られているので、私の解釈がいかほど計算されたものか、あるいは外れているのか、その辺も伺いたいと思ひまして、披露させていただきます。

見ていない方もおられるかと思ひますので、簡単に少しストーリーを紹介しつづきたいと思ひます。『あまちゃん』は、2013年に朝8時から15分間156回に渡って放送されました。脚本は有名な、宮藤官九郎さんの脚本で、物語が展開する場所は主に岩手県の北三陸の漁村、ロケ地は久慈という所と東京です。方言である「じぇじぇじぇ」が、その年の流行語大賞にもなり、話題となったのはご存知の方も多いかと思ひます。それまで、低下傾向にあった視聴率を回復させ、20%を超える視聴率を獲得した番組でした。話の軸は、主人公のあまちゃんは能年玲奈さん、今は別のことで話題になっていますが。母親の天野春子さんは、小泉今日子さんが演じています。おばあさんの夏、夏ばっぱと言っていますが、宮本信子さんというような俳優陣も女優陣も固めて、この3代の家族の物語です。主人公のアキちゃんが17歳で、両親と3人で東京の世田谷に住んでいるという設定です。高校に通っているが、いじめられていて一人で詩を書いているという暗い生活を東京で送っていて、母親からも地味で暗くて向上心も協調性も個性も華もない、パツとしない性格と全否定されている。家族自体も、上手くいっているハッピーな家族では無いという設定です。家族という点から、家族の変容について私は解釈をしているので、家族のことで見ますと、おばあさんの夏ばっぱの家族は、夫婦二人だけになっているが、夫は遠洋漁業に出ているので一年間に10日間位しかないという、そういう点から家族の体を成していない。もう一つ、ユイちゃんという、あまちゃんの親友になるのですが、外から見ると非常に良くできた家族なのですが、蓋を開けてみると、お母さんは途中で家出をしたりと、だんだん揺らいでいく家族です。最初に出てくる、いわゆる家族というのは、近代家族といひますか両親と子どもの家族はあんまり上手くいっておらず揺らいでいるという感じです。それがだんだんアキちゃんの移動によって、違う方向に展開していくという筋立てになっていると思ひます。感動して共感して涙が出てくるという話をさせていただきましたが、私が『あまちゃん』を見ていて一番面白と思ひたのは、むしろ予測を裏切る展開が面白と思ひました。それは一つは、あまちゃんがどんどん居場所を変えていく、それも何も成し遂げないで次々と変わっていく、これは初め見えていて意外性がありました。どういうことかという、最初、東京の高校ではあまり上手くいっていないくて、北三陸に母親と一緒にやってくるわけですが、おばあちゃんが、ウニを取ってウニ丼を作って売ったり、喫茶「リアス」やスナック「梨明日」といった海の近くで何かを営んでいるという非常にマルチなおばあさんなのですが、カッコいいと思うわけです。自分も海女になりたいと。「あまちゃん」には、いろいろな言葉がかかっていると思うのですが、海女の修行



をすることになります。海女役の女優陣が、また個性のある方々で、海女の集団になっている訳ですが、海に潜ってウニを取るのですが、なかなかうまくいかない訳です。なかなか潜れないうちにインターネットで知ったオタクたちが大挙して、あまちゃんを見ようとやってくる。ところが、まだ取れないのに、観光の目玉になってしまいました。仕方がないので、安部ちゃんが、ウニを取って海の中であまちゃんの籠に入れて、あまちゃんが取ったかのようにして売るというインチキをする訳です。それでも、押し付けてきたオタクたちは喜んで写真を撮るのですが。それでも頑張って、海女の修行を続けて取れるようになってほしいなああまちゃんを応援する気持ちで私たちは見るのですが、一応取れるようになるのですが、取れるようになった瞬間に海女を辞めて違うことをしたいと言い出します。次は潜水士になりたいと。東京の学校を辞めて地元の北三陸の高校に入りなおすのですが、そこに潜水学科があって何年も女子がいない、男だけの世界です。潜水士とは、橋などを作る時の土木工事をする際、基礎工事をする男の世界なのですが、種市先輩というのを見て、すごくカッコいいと思って自分も潜水士になりたいと転学科する。あまちゃんはどうかかなと思って、普通そこで応援してて海女で頑張ったらいいいねと思っていたら、違う方向に転換するということになります。ところが、潜水学科に無理やり7年も入ったことがないのに入った。そこで頑張るのかなと思うと、今度はさらにこの途中で、ウニ丼を売ったりするとオタクの人たちに人気でたので、ついでに「潮騒のメモリーズ」を結成する訳です。ユイちゃんとはもと、東京でアイドルになりたいと思っているので、その準備だということで、コンビになって、今度は、こっちの方に展開、海女から違う方向に展開していくという風になる訳です。今度は二人で東京に出て、AKBのような所に所属しようとするのですが、ユイちゃんがお父さんが倒れて行けなくなったので、一人で行くことになります。今度はそこで頑張ってアイドルになろうとするのですが、アメ横学園でアイドル予備軍になるのですが、ここでもパツとしない訳です。奈落という下の二軍の所で、シャドーの役もしますが、ところがやっぱりうまいこといかず、国民投票でも最下位になって辞めさせられそうになると。その時にまた、すし屋で、種市先輩がすし屋の職人の見習いになっていて、そこで女優の鈴鹿ひろ美さんと知り合いになって可愛がられて、付き人になる訳です。一緒に映画を作ろうということになって、出演もするのですが、失敗して撮りなおして撮りなおして女優としてもなかなか上手くヒットしない。何をやってもあまり上手くいかないという意外な展開。すごく何か頑張って乗り越えて苦勞して立派になっていくのかなと思ったら、そういう訳でも必ずしもないのです。

実はいわくがいろいろあるのですが、そうやって何をやっても長続きしないのだけれども明るいわけです。海女修行から始まって、次々と新しい世界にチャレンジしていくのですが、どれも成功しない、それでもあまちゃんは、これがおらの現実だといって受け入れるわけですが、明るく。努力して頑張って何かを達成するという今までの成功物語とか教育の物語というものを期待して見ていると、えらい違った展開になるなど、そこがまず一つ新鮮な所です。何事にも長続きしないのを見てるうちに私たち視聴者がだんだん楽しくなってくるのは、海女の修行ってそんな風にやるのねから始まって、潜水学科があるのだと、さらにはアイドル修行はなかなか厳しいのねと、奈落にいるとお寿司も食べ残しのような、かっぱ巻きしか残っていないのを食べさせられるのねとか、そういうことや女優デビューをして、女優の世界はこうなっているとか、あまちゃんがあちこちの世界を渡り歩いていくのを見ることによって、一緒に

なっているいろんな世界を楽しんでいくという、そういう風な感覚が出てくる。つまり、アキちゃんが越境的にいろんな所、いろんな世界に移動することによっていろんな人物や世界が交差していく、そういう面白さに惹きつけられていくと、そういう違う角度からの面白さというのがあります。いろいろな世界を経験してその中で古い絆や新しいつながりができていく、そういう意味では、実は昔からあるような定番と見ることはできるのではないかというのが、私の解釈です。武者修行というと、皆さんご存知かわかりませんが、もともと武者修行は、剣豪小説などに出てくる宮本武蔵とかが出てくるのですが、剣術家が強い相手に次々と試合を申し込んで、腕試しをしながら自分の技術を磨いていくというのが古典的な武者修行ですが、アキちゃんの武者修行は、かなり性質が違って、技を磨いて達人になることよりもいろんな世界に飛び込んで新しい経験をしてそこで、新しい出会いと古い絆が交差してつながり直されていくという、そういう面白さと魅力だと思います。成熟や熟達という点からは武者修行になっていない訳ですが、アキちゃんが未熟だからこそいろんな人が集まってきて、そしてつながりが広がっていくという、駄目な所があるからこそ、つながりが広く強く作られていく、そういう所があるのではと思います。だから、剣豪小説の面白さよりも、渡り歩くことでいろいろなつながりが出てくる、弱くても、弱くからこそ弱いもの同士が集まってつながりが作られていく、そういう魅力というのがこのドラマの一つとして私としては面白いなと思っていました。

アキちゃんが移動するのは、地理的に言うと東京と北三陸の往復、東京と自然のある東北の移動、それからその中で海女の世界、潜木士の世界、オタクと地元アイドルの世界、東京のアイドル予備軍の世界、女優の世界といろんな世界を渡り歩くわけです。都会から地方という物語は、80年代ディスカバー・ジャパンと、結構あった物語で、都会のごみごみした所で暮らすよりも自然の豊かな所で暮らした方がよいのだというような物語があるのです。最初は、そういう風に私も見ていたのですが、そうではなく、今度はアイドルになるといって変わるし、自然のウニを取ろうとしている所にオタクがインターネットを見てやってくるという、自然対都会とか、技術対自然とかそういった二項対立ではなく、いろんな世界が、一見対立的な世界が同時に成立する、壁がない、そして、いろんな所を越境していくそういう面白さ、越境することがアキちゃんをパワーアップさせていく。自分自身がパワーアップするというよりも、周りが押し上げていくような面白さ。その越境を支えているのは、彼女をめぐる古いもともと絆、つまり、リフレインする人生があると思います。例えばもともとお母さんの春子さんはアイドルになろうと東京に行っていた。そこで自分がアイドルになれなかったのは、鈴鹿ひろ美が歌が下手だから、口パクのレコーディングの影武者なわけです。鈴鹿ひろ美の影武者としてやっていた。それがアキちゃんを媒介としてそのつながりが新しく作りなおされる。あんべちゃんはアキちゃんの影武者なのですが、お母さん春子さんとは同僚だったというようなつながり、アキちゃんは今度はAKBのような所で影武者だった。みんながある種の影武者つながりのようになっている。そういう風な新しい絆、古いつながりの結び直しでもあります。そういうつながり方の意味を象徴するものとして、結構面白い言い間違いが多分、宮藤さんの案ではないかと思うのですけれども詰め込まれている。例えば、二人三脚というのを言い間違えるのですが、アキちゃんがユイちゃん和刘は二人で二人三脚だということを、二人で二束三文だと言うのです。つまり、二人で一山としてしか売れない駄目同士という言い方になってしまった。二人三脚な

ら前向きでいいのですが、でも二束三文の方がリアルと思うのですが、そのリアルな所を言い間違えてしまうところが面白くて、駄目なものと、弱いものとつながるということですね。それから、あんべちゃんが自分のウニを取ってくれるオラの影武者だということ間違えて、オラの落ち武者だと言います。これもある種リアルですが、そこに笑いを入れることで駄目同士のつながりというのがポジティブに作り直されるのではないかと、そういう所を私たちが見ていて救われるような感じがすごかったです。それから、最初は夏ばっパのカッコよさは去る者は追わない、娘が家出しても追わない、それがカッコいいということでしたが、アキちゃんがずっと居ることになって、夏ばっパの態度も変わってきます。去る者は追わず、これは変わらずですが、来るものも拒まないというのが加わったわけですね。そういう風にして絆が作り出されていく、こういう所が面白いというか癒される物語の仕立てになっているのではないと思ったのは、地方に回帰するとか自然回帰するとか、昔風のコミュニティに帰るというだけでなく、いろんなものがごちゃっと混ざって、特に排除しないような擬似共同体のような家族、家族のようで家族ではない、そういうわりと越境的なつながり広がる家族と言うようなものがある種、現代のロマンになっているのではないかという気がします。

昔、擬制家族というものがあって、丁稚奉公や女中奉公に行ったらその奉公先の家族と本当の家族ではないのですが、家族のように過ごしている。中小企業だと、社長さんのことを親父さんと呼んだり、擬似家族的なものがありました。今は組織からそういうものが無くなっている、そして『あまちゃん』ができた時は震災後、もちろん意識されていると思いますが、震災後の社会の中でどうやったら私たちがつながりを作って、新しい世界を生きていくかというそういう課題の中で、家族、閉じられた家族ではなく、擬似、擬制家族が広がっていくような、擬似共同体、家族と共同体がつながったような癒しの物語としては、非常にうけたのではないかと、こういう解釈をして、私としては大変面白かったのです。長くなりましたが、こういう見方で『あまちゃん』を見ていました。私が非常に気にしていることは、この私の解釈が、ドラマは非常に計算されて作られているというお話でしたので、フィットしている、計算上成り立っているものとかかなり近いものなのか、それともかなりずれた解釈なのか、ということも含めてまた阿部先生にお伺いしたいと思いますけれども、皆さんもどういう風に見たのかと、その点も合わせて伺えればと思います。

一色：阿部先生、コメントをいただけないでしょうか。

阿部：私は『あまちゃん』を実はあまり見ておらず、クドカンさんのドラマなのですね。クドカンさんは私のイメージだと、ごった煮といふかなんでもあり、どういう価値観もありで、最後どうなるかといふのを楽しんでいくという人だと思いますので、おそらくは、作り方としては理屈としてのいろんな設計よりは、試し試し進めて行って作っていったのではないかなという印象がします。解釈として間違いは無いとは思いますが、多分先が見えないまま走らせて行った作り方ではないかと、私は推測はしております。

一色：それでは学生の方々。お二人の先生のお話を聞いて、こういう所はこうじゃないかとかありませんか。阿部先生がお使いになった『チョッちゃん』は、黒柳徹子さんのお母さんでした。そして『あまちゃん』。稲垣先生が年末の忙しい時にNHK オンデマンドで、全部『あまちゃん』を見て、その結果今、非常にきちっと憶測を裏切る展開などをおっしゃってくれました。皆さん方もドラマに対して、『チョッちゃん』にしろ『あまちゃん』にしろ、皆さんと年代が少し上かもしれないですが近い同じ女性の方です。女性からみて、今日二人の先生からいろいろお話いただいたドラマ、学生の皆さん方、女性の方々がどういう風に感じたのか、そこの所で何か最後3分しかありませんが、コメントか質問等々いただければと思います。いかがでしょうか。手を挙げていただく方はおられますでしょうか。ドラマ好きな方、確かおられましたね。自分が見るドラマは別のもの、こういうドラマが好きだということでも何でも良いです。ドラマについて何か言ったださる学生はいませんか？ それでは、お二人から何かご質問を言っていただけないでしょうか。

阿部：今やっているドラマだと、20代の女性が一番見ているのが、フジテレビの『僕のヤバイ妻』。見ている方いますでしょうか？ これは先ほどの共感、心情ラインのドラマではなくて、ストーリーの面白さ、先が読めない、ひっぱりが強いというような、そういう面白さなのでしょうね、きっと。つまり、木村佳乃さんなり誰かを見て泣いてしまうようなものと全然違うドラマです。そういうドラマの作り方もありますし、そういうドラマが基本的には受けます。『半沢直樹』みたいなことであるとか、だけでもその先に何か共感できるようなドラマもありますね。

一色：稲垣先生、学生たちに何か質問はありませんか？

稲垣：そうですね、特にはありません。

一色：それでは、学生の方からどなたか、自分はこういうドラマが好きだとか。今、1/3位手が挙がりましたよね、阿部先生から言われた『僕のヤバイ妻』。それ以外のこういうのが面白いと、別のドラマが面白いとかそういう人はいませんか。

阿部：『トットてれび』は、黒柳徹子さんの自伝をもとにして満島ひかりさんが演じている土曜日の8時台にやっているちょっとシュールなドラマです。これも、不思議なもので、若い方に結構うけているのですが、カタルシスとも共感とも違う不思議なムードのドラマです。これもおすすめです。

一色：チャイムが鳴ってしまいましたので、学生の皆さん方がどんなドラマを見ていて好きなのか、もう少し知りたいなと思ったのですが、そこまではいかなかったようです。いずれにせよド

ラマというものは総合芸術ですので、皆さん方もいろんなドラマを見ていただきたいなと思います。それでは、第一部はここで終了いたします。

## <第二部>

**一色：**それでは、第二部ということで一般の方々とディスカッションをしていきたいと思います。ここからは、質問、コメントなどお二人の先生と話合うようなところになります。では挙手をお願いします。

**一般 A：**先生方、今日はどうもありがとうございました。今私は朝ドラの『とと姉ちゃん』を見ているのですが、もう少し長く『チョッちゃん』の方を長く見たかったです。私も『チョッちゃん』見ていました。朝ドラを見るようになったのは『おしん』の影響でして、小中学校の授業でも取り入れていました。『とと姉ちゃん』と『チョッちゃん』を比べると、映像が違っているなど、大分変わっているなと思っております。以上です。

**一色：**先生から見ていかがでしょうか。『とと姉ちゃん』と『チョッちゃん』を比較して。

**阿部：**随分朝ドラはムードが、作り方も含めて変わってきているのかもしれません。

脚本を含めた作り方でお話すると、規範と言いますか人間の姿の描き方が、前は使わなかった類のもの、例えば不倫だとかもう少し幅が広がってきています。だらしない父親みたいなこととか、前の家族関係の描き方が、朝ドラが持っていた規範みたいなものが、どんどん幅が広がって、お話の作り方の幅が広がってきているのかもしれないという気がします。以前の脚本家やスタッフが決して王道を作ればよいと思っていたわけではないのですけれども、いろんなことが行われている中で言えば、ストーリーの盛り込み方が前より大人向けということも含めて違うものが出てきている。つまり、これくらい書いていいでしょう？ というような次世代の脚本家たちが出始めている感じがします。最近で言えば『あまちゃん』は最たるものだと思います。ある種、朝ドラの王道のようなものは、もはや有って無きがごとしみたいな、これは夜の番組として出してもおかしくないというような要素が随分入ってきているということですね。

**一般 A：**役者さんが若返っている感じがしました。『とと姉ちゃん』と『チョッちゃん』を比べて。私は『チョッちゃん』に出ている役者さんは知っていますが、今の『とと姉ちゃん』はあまり知らない人が多いという気がします。ありがとうございます。

**一色：**稲垣先生はいかがでしょう。



**稲垣**：今のコメントに関してですが、阿部先生がおっしゃった中で、今日“共感”ということでおっしゃっていたのですが、確かに私の世代ですとこういう共感、このシーンでは共感を持つだろうと、そのまま追体験ができるというのがカタルシスだったと思います。ですが『あまちゃん』や『僕のヤバイ妻』もそうなのですが、予測を裏切るといいますか、差異化するといいますが、安心して共感できるというよりも、え？っていうような。やはり時代が、家族や制度が安定していて、それを追体験で安心していくというカタルシスから、もっと変わっていく、差異化していく、どんどん社会が変わると同時に、物語も変わっていく。それをカタルシスと呼べるかは分かりませんが、ドラマ自体もそういう風に変わっていったのかという印象を受けて、非常に面白いと思いました。そして、俳優さんが若返るというのはもちろんそうなんですが、私は『とと姉ちゃん』を見ていないのでわからないのですが、時代劇も同じなのですが、昭和とか朝ドラでは戦前の素材を扱っていますよね。ですが、若い俳優さん10代の方が演じると所作や言い回しなど、同じセリフを言っても、当時とかなりニュアンスが違っているかと思うのです。現代風に。その点について、良いのか、あるいは面白いのか。時代劇だと、殺陣とかもジャンニーズがやっているところなのは違うというような見方もあると思いますし、それがジャンニーズだから良いのよという見方もあります。時代背景や物の言い方ひとつ、立ち振る舞いの変化について、演出ではどのように制作側では考えられているのか聞きたいです。

**一色**：なるほど。阿部先生、お願いいたします。

**阿部**：そういう俳優さんがいなくなってきたということかと思うのですが、世代が若返っていくと、昔の映画スターや歌舞伎系の人でない人がドラマをやっていくと、どんどん違っていくというのは明らかにそうでしょうし、重みのある人がどれだけいるのかというのも、俳優さんはスターになっていくと、ある種の貫禄みたいなものがあって時代劇にはまっていってしまうのはあります。なかなかいい人をどうやって捕まえて、どうやって組み合わせるかは、随分前から気にはなっている所だと思います。現場ではそのあたりが一番悩みどころであったり、苦心のしどころですね。

**一色**：ありがとうございます。それでは、他の方。手が挙がりましたね。

**一般B**：今日はありがとうございました。とても楽しく授業を受けさせていただきました。特に最初の画面を見ながらセリフを追っていくのもなかなか楽しかったです。そして、稲垣先生のプログラムに関するコメントが非常に面白くて、例えばリフレインする人生だとか、どういう意図で作られているのかとか、そういう違った面で教えてもらった感じがしてとても勉強になりました。質問が二点あるのですが、一点目は、朝ドラは誰をターゲットにしているのかというのをいつも疑問に思っていたのですけれども。私が仕事をしている時は、この時間帯は出勤途上でとて

も見られない、もちろんお昼も見られないということなので、どういう方が主に見ていらっしゃるのかということ。辞めてからは、あまり興味がなくて見ていなかったのですが、お友達からこれ面白いよと言われて、ちらちらとは見ているのですが、どういう方をターゲットにされているのかなということと、もう一点は、この朝ドラがどの程度がフィクションで、どの程度がノンフィクションの部分なのか、どれくらいの割合であるのかということを知りたいです。と申しますのは、今度放映される『べっぴんさん』は、坂野惇子さんという甲南女子を出られた方で、今知っている方が山ほどいらっしゃるのです。表も裏も。私もその一人なのですが。何年も付いて秘書をしていたものですから。その時に、フィクションと言われてしまったら、嘘でも OK になる訳です。ところが、彼女自体をたくさん知っている人が現存しているわけですので、あまりに違うと彼女と全然違うじゃないという想いが絶対に出てくると思います。現実みんな、こういうのを変に取られるのは嫌だよねという声を私は結構聞いています。外にでない彼女の面だとか、今、シナリオ、ストーリーがインターネットに出ていまして、彼女が 18 歳でお見合い結婚してなど、どこまでが本当か嘘かはわからないのですが、出ているのですが、現実では彼女は大恋愛の末に結婚している訳です。あまりにも実際、実像と違うと私は嫌だと思う部分があるのですが、どの程度フィクション、どの程度ノンフィクションの部分があるのかと、知りたいと思ったのですけれども。

**一色：** 次回の朝ドラの脚本家は誰なのでしょうか。

**阿部：** 『べっぴんさん』は次の朝ドラで、大阪で作る作品ですね。

**一般 B：** そうです。それで、ファミリアという子ども服を作る。彼女はずっとここ甲南女子高を出られていて、甲南甲南と言われていた方なのですが。ただ、言葉にしても彼女は関西弁・大阪弁が大嫌いな方でして、神戸弁といっても阪神間の言葉しか使われていない方で、大阪弁大嫌いという方なので、出てきた方が大阪弁を使われたら嫌だとか、雰囲気が違うとか、言葉に非常に厳しい方だったので、そのイメージが崩れるとなるとなんとなく嫌だという想いと彼女はこれだけは絶対に許せないとか、そういう部分が脚本家に全然わかっていらっやらない場合に、彼女の実像とあまりにも違うとどうなのかなと。だけど、あくまでもフィクションと言われたらそれでも OK ということなのでしょうけれども。これまでの作品に関してもどの程度フィクションなのか。彼女の場合は、はっきりと坂野惇子さんと公表されていますよね。ですから、あまりにも現実と違うと違和感を感じてしまって。あまりにもたくさんの人が現存して知っているので、それでちょっとどうなのかなと疑問に思ったものですから、もしわかれれば教えていただきたいと思います。

**阿部：** モデルという言い方は、本当にある意味微妙で、モデルを貶めては決していけない訳です

し、モデルの人権を侵害してはいけない。だけでも、分かっている情報だけでは、ドラマが作れない可能性があるのでは足し込んでいかなければいけないとか、ないし、ドラマとしてここは事実とは違うのだけれども、ここまでは変えさせてもらうという風なこともあるかもしれない。それは、許可をとらないかもしれない。ご遺族にとか。坂野さんはご存命でいらっしゃるのですよね。生きているならなおさら、モデルとうたっている時にやたらなことは、少なくとも私はしません。多分、脚本ができた段階で、内々でご本人に読んでもらって、これでいいでしょうか、気になる所は直しますくらいはすると思います。もしも見ている方が、これはひどいという意見があれば、それはどんどん放送局に言っていただくということです。そして制作者が悩む、考えるということです。つまり、そういういろんな話が出てくることを覚悟して選んで作っていることだと思います。

**一般 B：**朝ドラのターゲットについてです。

**阿部：**ターゲットですが朝ドラについては、男性は60代以降、女性では50代以降、多分あまり働いていない方が一番メインであって、働いている方は朝だけでなく、いろんな時間帯で見ている可能性があるというのが現実としてあるとして、ただし決して50代向け60代向けで作っているわけではありません。

**一般 B：**あまり若い人を想定はされていないのでしょうか。

**阿部：**つまり、若い人だけを想定はしていない訳です。しかし、若い人にも見てもらいたいという気持ちで作っているのは、明らかにあると思います。キャスティング的な所も含めて。ただ、結果として見ていただいているのは、そういう層であるということです。朝ドラに関しては、特に層を定めるということではなくて、幅広い層の方に見ていただくというのが、基本かと思います。それは、昔もそうであったと思います。

**一般 C：**よろしくお願いします。今日この講演会には、両先生方に教えていただきたいことがありまして、参加させていただきました。話の筋道なのですが、ターゲットは誰かと、実は私はそのターゲットの一人です。リタイアしてフリーですので、朝出勤時間を急ぐ必要はありませんので、今はゆっくりと『とと姉ちゃん』、そして『あまちゃん』そういうものを見せてもらってきました。これは、質問の本筋では無いのですが。

今日の講演で、ドラマを通して人の心を動かすというのが一つのキーワードだと私は思っています。ドラマを通じて共感を持つということは非常に大切なことではないかと、固い見方をするのですが、大切なことだと思います。『とと姉ちゃん』や『あまちゃん』を見て、めそめそ私はしたことはありません。だけど、ワクワクはまだこの歳になったのですが、したことがあります。このように人の心を動かす要素

がドラマの中にあるということを、なぜ今期待して、先生方のお話を伺ったかと申しますと、実は私、教育関係なのですが、環境教育をやっております。朝ドラとの内容と方向は違うのですが、家族的なドラマから国際的地球部外のドラマといえますか、今、地球環境が危ないとそういう風に言われております。それに対して、環境教育という10何年か前から非常に重要なものとして現在もESDという形で持続可能な社会を継続する環境教育ということが現在も行われております。しかし、なかなか効果が上がっていないようなのです。上がっていないとは言えないのですが、あまり効果が期待できない。その証拠として、まだどんどんCO<sub>2</sub>ガスが増えていますし、一般市民の浪費、生活も改善されていません。私の考え方では、前回子どもというのは、学校ができて子どもができたんだというそういうお話を伺ったことが有るのですが、地球環境のような問題、固い問題になってきますと、まさにテキスト、教科書的な教育が行われて、本当に固いわけですね。いろんなことを自然観察会だとか、体験学習だとか、あるいは節約をしましょうとか。こういう環境教育の今までのあり方をなんとかしてはいけなと。何かいい方法は無いかという中で、今日のテーマにぶつかりまして、これは非常に大切だと。どういうことが大切かと申しますと、やはりそういう固い課題であっても、あるいは国際的な、あるいは社会的な課題であっても家庭のドラマのようなああいう雰囲気、ああいう流れの中で勉強したり、心を動かすようなチャンスを与えるべきではないかと。いわゆる一番身近なのは、テレビドラマを通じて、非常に固い地球環境問題や環境保全や生活改善などを劇場化していく、そういう方法が大切かと思うのですが、そういう内容についての試みは行われていると思うのですが、私の身の範囲では小さい範囲では見ていませんので、効果が上がっていないわけです。だから、朝ドラのような身の回りの、身の丈の生活のあり方を通して、今度は地球環境のような、場合によっては宇宙環境のような大きな課題に一般庶民が巻き込まれている。いわゆる心が動く。そういう風なテレビドラマやNHKドラマが可能だろうかということについて、教えていただきたいと思います。

**阿部：**私が心が動くと言っているのは、人間の感情の部分の訳なのですが、テレビの役割は人の感情を動かすとともに、情報をきちっと伝える、それは理性に訴える、理性に働きかけるという風なことでもあります。何か人に伝えていくにあたっては、きちっと情報として相手を納得させるというのは、また別だと思います。感情よりもむしろ、理性に働きかけるという方がまず先だと思います。今おっしゃること、私の個人的な感想です。その伝え方が大事なわけですが、その時にはじめて理性に訴えかける方法として、見え方としてどう感情的にも相手を動かすようなことが加えられるか、という順序で考えていった方がいいと思います。

**一般C：**このレジュメで、脚本づくりのプロセスをお話いただいたわけですね。私は実は、もう一つ関心があるのは、脚本以前の問題とどういう風に関わってくるかということなのです。脚本は一番の原本的なもので、それに基づいて進行するわけですが、それが作られる思想性といえましょうか、そういうものも非常に重要かと。今日の課題ではないのですが、私はその面に非常に関心を持っています。もう高齢です。昔のことしか言えないのですが、『鉄腕アトム』というアニメ

がありました。このようなアニメが今あるだろうかと思っています。『鉄腕アトム』は、鉄腕なわけです、ロボットなのです。ずっと見ていきますと単なるロボットで万能の機械ではなく、時には泣いたり笑ったりと人情的な面がロボットの中にある訳です。そして、お茶の水博士と意思が疎通したりと、私が若かった頃のアニメですが、そういうあたりが非常にみんなの共感を得たのではないかと思います。そういう共感ができるアニメが最近無いような気がするのです。これは私の意見としてですが、そのあたりについて、先生方のご意見がございましたらお聞かせ願います。

**一色：**脚本の思想性というお話が出てきましたが、脚本家はそういう思想性のようなものも持っている人も当然いると思うのですが、どんな感じでしょうか。それともあまり思想性は？

**阿部：**思想という言い方が良いかどうかは別として、何をどう盛り込むかは脚本家だけではなくて、スタッフ全員が考えている所ですから。おっしゃっているのは、脚本づくりが走りだす以前にその企画自体が何をもって、どういう風な考え方を持って生まれていくかということですね。

**一般 C：**そういうこともありますし、その本そのものです。何か脚本家自身の非常に深い思想性をお考えになったことがあるのでしょうかということです。

**阿部：**脚本家の話でよろしいでしょうか。

**一般 C：**まずは脚本家で。後の流れはそこまで思想性を入れる余地は無いかと思います。ですが、脚本家の所までは、やはりどういう風な思想を持っているかということは関わってくるかと思います。それは非常に重要なことではないかと。全てのテレビの番組がそうではないかと思いますが、やはり人の心を動かす、変える点については、どう変えるか、なぜ変えるかというようなことも前もって意識の中にあれば、また違った形のドラマができてくるのではないかなと思っています。

**阿部：**おっしゃる通りだと思います。少なくとも電波を使ってある創作物を多くの人に見てもらうにあたっては、どういうつもりで作っているのかというように問われれば、何ら思想性なく、いや思いついたのですという風では済まない。つまりテレビはどの番組もそうなのですが、作っている制作者にとってどういう意味合いを持って何のために作っているというのは、自分の足元を固めるという意味で常に考えています。脚本を頼まれた作家も、その中で何を大事にして何をお客さんに伝えるかというのは、自分の存在にも関わることであるので、それは考えつつ仕事をしておりますし、そのやり取りは、制作者とされているとは思いますが。



**一般 C:** 先生のはじめのお話の所で、脚本家はかなり全体的なことを考えて、理論的な人も多いということをお話されたと思うのですが、そういう点についても非常に関心をもつ観客もいるということですので、よろしくお願いします。

**一色:** よろしいでしょうか。後ろの方にいらっしゃる方で、手が挙がりました。

**一般 D:** 今日はありがとうございました。朝ドラとか楽しく見させていただいているのですが、なぜ面白いのかと自分なりに観察して見ていなかったのですが、先生方のお話をお聞きして、なぜ面白いのかが分かったような気がしまして、とても貴重なご意見を聞かせていただき、ありがとうございました。

最近思うのですが、朝の連ドラと夜の大河ドラマをいつも楽しみにしていたのですが、最近、大河ドラマが不発というか、あまり面白いものがなくて、最初の1、2回を見ると違和感を感じるなど、主人と二人でもう止めておこうとなるのですが、朝ドラは演出なのか脚本がいいのかすごく感情移入ができるのですが、やはり朝ドラの方に力を入れていらっしゃるとか、そういうことはあるのでしょうか。そしてもう一つお聞きしたいのは、俳優の方々が、演技はお上手なのですが、声が聞こえにくくて特に草刈正雄さんとか今年大河ドラマの声が聞こえにくくて、重要な所が聞こえないのですが、私の友人は、耳が聞こえない方用のテレビの操作をして、それで聞いていると言っていたのですが、そういう俳優さんはいいのですが、声はその画面で低い声を出さなくてはいけないのを優先させるのか、それともやはり聞こえるように言った方がいいのか、そういうのは演出家の先生が判断されるのでしょうか。その点をお聞きしたいと思ひまして。

**阿部:** 作り方としては。大河ドラマはこれだけ回を積み重ねていくと、主人公を誰にするかという点、なかなか有名な方が主人公にならないので、一年間のお話をどう作れるかというような、本当に朝も大河も一年分のお話を作り込んでいくという点で、実は四苦八苦します。分量が多い訳ですから。でも朝ドラは半年好調にいけているのいうのだから、これはどういうことかなと私も内心思っています、大河の方が今は作り方が難しい時代になっている気は確かにします。

声が聞こえるか聞こえないかというのは、俳優さんにはいわゆる滑舌がいい人と悪い人がいます。音声的にそれが上手に取れるか取れないか技術の問題ですが、それを時間の中でなかなか取りきれない場合には、先ほどお話した音の作業の中でなるべくその声を聞かせるようにいろんな調整をしたりします。

**一色:** よろしいでしょうか。時間も終わりになりつつありますので、まだ手を挙げていらっしゃらない方、短くでしたらコメントか質問かございましたらお願いします。よろしいでしょうか。

私自身、個人的な部分ですが、連続テレビ小説、最近のものはすごく面白いと思っております。なぜ面白いかと申し上げますと、私は甲南女子大学の教員でありまして、今の時代の若い女性の人たち、そ

の女性の人たちが社会の中で生き生きと生きていく部分の所と歴史的な所で、男性が優位で女性は家庭に居ればいいと、こういう所から変わって、例えば『あさが来た』は、最終的に新しい日本女子大を作り上げたわけです。学生たちも新しい今の時代に素晴らしいことをいろいろやってもらいたいという意味で、ドラマが後ろから風を流してくれるのではないかとと思っています。『とと姉ちゃん』も、あの時代のタイピストは使い捨てだという者になっていたのが、今は変わってきています。ですが今の時代も男女平等と言われていて、なかなかそうはいかない。例えば幼稚園にお母さんが連れていくなどは、お父さんもフィフティフィフティでできるような。先ほどおっしゃった地球環境とは少し違いますが、新しい時代の女性をテレビ小説でもやっていただきたいと、最後に私の希望としてお伝えしまして本日の子ども学講演会はおしまいにしたいと思います。ありがとうございました。